

国頭村の共同店と泡盛

松岡 竜大

祖父が亡くなって約 10 年経った今、私は祖父の育った国頭村へと向かった。沖縄本島最北端に位置する国頭村のある集落に叔祖父とその妻が今も住んでおり、そこに宿泊させてもらった。豪勢な食事でもてなしてもらっていると、叔祖父から「シマー（泡盛）呑むかー？」と声が飛んできた。そこで私は小瓶のまさひろ（まさひろ酒造）を水割りでいただくと、叔祖父はまるた（やんばる酒造）を水割りで呑み始めた。

国頭村において、従来住民たちは各集落に存在する共同店（後述）にて泡盛を購入していた。現在、国頭村内の共同店は減少し、叔祖父の住む集落の共同店も閉業したが、叔祖父がまるたを呑んでいるのは、かつて集落にあった共同店が仕入れていた泡盛が専らやんばる酒造のものだったためである。本エッセイでは、国頭村における共同店と泡盛を巡る諸相について、2025 年現在も営業している共同売店に着目し、その一端を紹介する。

まず、沖縄県北部や離島を中心に存在する共同店について、紹介する。共同店は、小売店における購買事業を主に行っており、集落（字）毎に住民らが共同出資することで運営されている [宮城 2004 : 15]。共同店の歴史は古く、1906 年に奥に設立されて以来、沖縄本島北部を中心に広がり、戦時中は一時廃止されたものの、戦後に再び営業を始めた [宮城 2004 : 15]。日用品や飲食物が販売されており、人々の生活を今も支えている。元々は国頭村の全集落（20 ヶ字）に存在したが、現在では、人口減少などの影響を受けて、浜（写真 1）、桃原（写真 2）、宜名真、辺戸、奥、安田、安波（写真 3）の 7 ヶ字のみが営業している（図 1）。



写真1 桃原の共同店の酒類コーナー（2025年9月12日、筆者撮影）



写真2 浜の共同店の酒類コーナー（2025年9月12日、筆者撮影）



写真3 安波の共同店の酒類コーナー（2025年9月11日、筆者撮影）



図1 沖縄本島北部地図（筆者作成）

今夏、私は全共同店を巡る中で、興味を引いたのは泡盛のラインナップについてである（表1）。ほとんどの共同店で中心的に販売している泡盛と言えば、またや山原くいなをはじめとするやんばる酒造の泡盛である。かつては宜名真や浜にも泡盛の酒造所が存在したが、現在は閉業しており、やんばる酒造が沖縄本島最北端（大宜味村田嘉里）の酒造所

であることによるであろう。

ここで注目したいのは、安波の共同店で取り扱っている泡盛がまさひろ酒造の泡盛のみという点である。なぜ本島南部の糸満市に位置するまさひろ酒造の泡盛しか安波の共同店では売られていないのか？

表 1 泡盛の陳列数（筆者作成）

字	泡盛の銘柄(左から順に陳列数が多い順)	注記
浜	まるた、やんばるくいな、久米仙、残波、海人、美しき古里	
桃原	まるた、やんばるくいな、美しき古里、残波	
宜名真	久米仙、まるた、残波	まるたのみ一升瓶、久米仙は小瓶と紙パック
辺戸	まるた、まさひろ、島唄、久米仙	来訪日休店中だったため、入り口のガラス越しに視認できたものを順不同に記載。
奥	まるた、やんばるくいな、美しき古里、残波、菊之露、久米仙	
安田	やんばるくいな、まるた、久米仙、美しき古里、菊之露、まさひろ、海人、龍泉	
安波	まさひろ、島唄、海人	
<p>補記 1) それぞれの酒造について、「まるた」および「やんばるくいな」はやんばる酒造、「まさひろ」、「島唄」および「海人」はまさひろ酒造、「美しき古里」は今帰仁酒造、「久米仙」は久米仙酒造、「菊之露」は菊之露酒造、「残波」は比嘉酒造、「龍泉」は龍泉酒造。</p> <p>補記 2) 表中記載、「やんばるくいな」は「やんばるくいな」および「山原くいな」双方を含む。</p> <p>補記 3) 浜、桃原は 9 月 12 日訪問、宜名真および辺戸は 9 月 13 日訪問、奥、安田、安波は 9 月 11 日訪問。</p>		

従業員にうかがったところ、沖縄本島東海岸の海を介した交易にその答えが現れる。安波は国頭村の東海岸に位置しており、かつて海上輸送の役目を果たしたやんばる船は、安波と同じく東海岸に位置する与那原とを結んでいた（図 2）。まさひろ酒造のホームページによると、戦前は首里に位置したまさひろ酒造は、1949 年から首里の石嶺に工場を移す 1967 年まで与那原に工場が存在した。安波—与那原間の交易によって、与那原に所在したまさひろ酒造の泡盛が海を渡って安波に届けられていたのである。



図 2 沖縄本島地図（筆者作成）

国頭村史によると、かつては険峻な坂や溪谷、河川によって「陸の孤島」と化していた集落も存在したという。そのような状況で、船が交易に重要な役割を果たしたということは想像に難くない。現在では国道や県道が通り、交通の便が発達したが、安波の共同店の泡盛コーナーには、沖縄本島東海岸の海を介したモノの移動の名残が見いだされるのである。

安波の共同店とまさひろ酒造に関して、最後に一点課題を挙げて本エッセイを締めようと思う。国頭村史によると、安波共同店の酒の仕入れ先について、「戦前戦後を通じて『まさひろ』一本」という記述が見られる。しかし、まさひろ酒造が与那原に工場を移したのは、1949 年と戦後である。この食い違いをいかに解釈すべきかが今後の検討課題である。

参考文献

国頭村役所 1967『国頭村史』国頭村役所。

宮城能彦 2004「共同売店から見えてくる沖縄村落の現在」『村落社会研究』11(1):13-24。

(まつおか・りゅうた 東京都立大学大学院)